

私は小値賀島という長崎県五島列島にある小さな離島に住んでいる。人口は約2000人で高齢化率は50%を超えている。島に1つの診療所は島民の唯一の頼りであるが、医療設備やスタッフの人数は十分ではない。本土の病院への通院は最速で往復3時間かかり、身体的・経済的負担が大きい。2045年には65歳以上の人口が60%を超えると予想され、診療所の役割はより大きなものとなるだろう。私は未来の地域医療を「地域住民の安心な生活を守る存在」として描きたい。

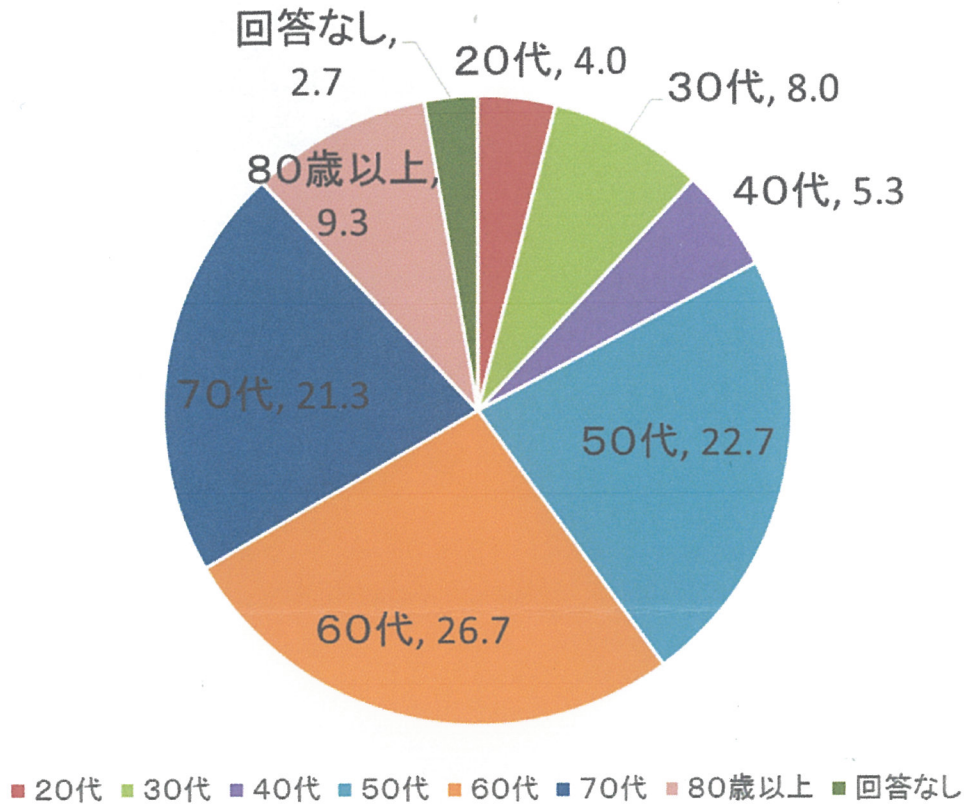
この小論文を書くにあたり、診療所の利用者に島民の医療へのニーズに関するアンケートを行った。回答者の年代を見ると診療所を利用する過半数が50歳以上であった。これより今後診療所の利用者が増えると考えられる。そして「総合的に診療ができる医師の常勤」や「十分な医療スタッフ」「終末期を迎える体制が整っていること」を診療所に求めていることがわかった。これら調査結果から私はこの島の医療に求められるものを大きく2つ考えた。

一つ目は、先進技術を利用した医療環境である。先進技術の例として医療用ロボットの導入を挙げる。島内で手術可能になれば島外へ搬送する必要がなくなり、患者の負担を減らすことができる。現在、国産手術ロボットである「hinotori」を用いて5Gを使った遠隔手術の実証実験が進められている。これが実現すれば、島内にいながら本土の専門医による手術が可能になる。さらに、テレビ電話などを用いた遠隔診療が実用化すれば、島内にいながら様々な専門的な診療が可能となる。常勤医師が少ない診療所の短所を補い、島民の安心した生活をサポートできる。

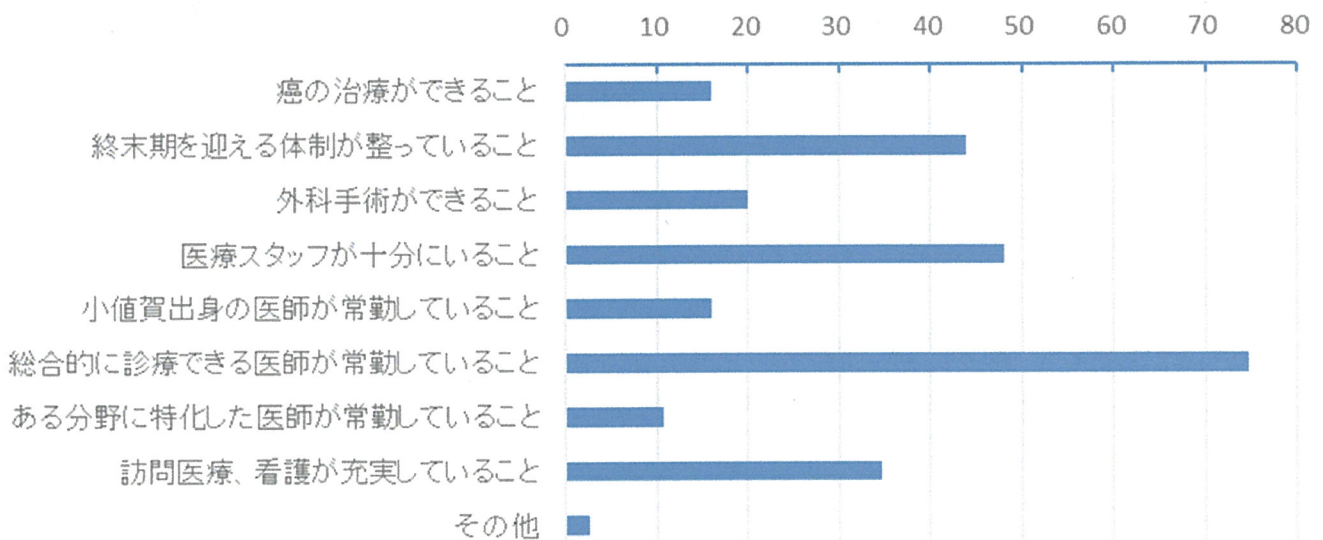
しかし、先進技術を利用するだけでは不十分だ。島民は「終末期を迎える環境」を求めている。「生まれ育った場所」「顔見知りの医療スタッフがいる」や「近くに親族がいること」が終末期を過ごすうえで心強いという声を聞いた。高齢者が多い本島では、人と人の付き合いが大事にされている。私は離島往診や訪問診療、施設でのワクチン接種など、スタッフが診療所で医療を行うだけでなく患者宅に赴き、地域に密着する医療も残したい。そこで私は地域医療に求められるものの二つ目に、診療所のターミナルケアの充実を挙げたい。ターミナルケアとは、治療を目的とせず、患者の残された時間を大切にしようとするものである。小さな島である本島は、患者の生まれ育った環境や家族構成が見えやすく、患者らしい生活を尊重しやすい。

小値賀島は今後さらに高齢化が進み、高度な医療を求める島民が増えることが予想される。しかし、医療資源の不足や常勤医師の不在に不安を抱えている人も少なからずいる。私は将来救急医療を学び、小値賀島の医療を担う存在になりたい。この2つの柱を中心に地域医療に従事し、島民の安心した生活を第一に守ることで、私を育ててくれたこの島と島民の方へ感謝の気持ちを込めた恩返しをしたい。

## 年代別 診療所の利用者(%)



## 小値賀町の医療に求めること(%) \* 複数回答可



### 参考文献

『人口ビジョン』 小値賀町 (2016)

『第2期 小値賀町まち・ひと・しごと創生総合戦略』 小値賀町 (2021)

MEDICAL DX <https://medicaldx-jp.com/news/89>

イリーゼ <https://www.irs.jp/article/?p=33>